

小林多喜二と『不在地主』のころ

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 四・一六事件
- 2 銀行で
- 3 佐々木妙二
- 4 大月源二
- 5 昭和4年の状況
- 6 瀧子との再会
- 7 多喜二のかかわり
- 8 『中央公論』と
- 9 テーマの由来
- 10 文学の大衆化
- 11 執筆
- 12 西野の批評
- 13 雨宮と多喜二
- 14 その後

はじめに

これは、小林多喜二伝（33）である。

1 四・一六事件

1928年の3・15事件後、個々に共産党逮捕が行われていたが、8月にも中間検挙が行われた。3・15と翌年の4・16との中間という意味である。

1929 年 4 月 16 日に、再び日本共産党の全国一斉の検挙があった。前年の三・一五事件で 日本共産党との闘いは終わったと 特高は考えた。しかしまた党が伸びた。それで警察は二度目の全国検挙を行なった。それにまた、三・一五で取り逃がした中央委員を根こそぎ捕まえたいと、特高は考えた。掴まえるべき中央委員は、市川正一、佐野学、鍋山貞親、三田村四郎であった。

菊池克己（東京地方オルガナイザー）が捕まり、東京と指導党組織を警察に喋り、それによって間庭末吉⁽¹⁾らが捕まった。間庭は黨員名簿などをもっていたので 全国黨員が判明した。これで特高は 4 月 16 日、全国検挙を行なった。間庭は、ソ連にいた時の見聞で、それを真似て黨員証を発行した。これを市川正一に批判されて回収した。そして焼却せよと言われたが、そうしなかった。それを警察で喋った。

間庭の供述書によると、小樽では黨員 6 人で、「松本利三、風間六三、小川万助、佐藤稔、島田正策の 5 人は黨員にまちがいがないと思いますが、他の 1 人は、森、松本、河村、山口のうちだれであるか 記憶がありません。」とある。

額額文書では、「[小樽地区] オル⁽²⁾ 森良玄、風間六三、松本和蔵ほか」とある。

三・一五の検挙は 大ざっぱだったが、四・一六はちがった。特高体制は三・一五とは格段に強化され、みんな日本共産党のことを勉強してこの日に臨んだ。その上、特高は、黨員名簿、入党推薦状、黨員証などの決定的物証を入手していた。彼らは綿密な計画をたてた。最高幹部を絶対に捕まえ、共産党が二度と立ち直れないようにする、そのため検挙者の取調べがきつくなってもかまわない、と。

松阪によれば、こうである。

四・一六事件とは、そ [昭和三年] の翌年の昭和四年の四月一六日に、やはり一斉検挙をやった。これは、前の検挙の後に、党を破壊された共産党の残党が 党の再建運動をやって組織をやり直そうとした。これを一斉に検挙したのが四・一六事件……。⁽³⁾

警察は、1928年3月15日事件で、千数百人も捕まえたが、党の重要部を検挙していないことがわかった。三・一五事件の直後、中央委員中尾勝男が捕まり、警察は彼の暗号による党員名簿を押収した。暗号はすぐ解読され、党の全容が分かった。そして地下組織の大物のほとんどを取り逃がしていることが知れた。そこで警察は、渡辺政之輔、鍋山貞親、佐野 学、三田村四郎、国領伍一郎、市川、福本和夫らの幹部を追うことにした。山本懸三、難波英夫は、モスクワへ逃れた。佐野、市川は、モスクワのコミンテルンへ行った。7月末に福本が、8月初に河合悦三が捕まった。渡辺と鍋山は上海へ行った。10月3日に国領が捕まり、10月6日に渡辺が自殺した。さて、市川と間庭末吉が10日に帰国した。1929年3月に鍋山が帰国した。決定的なことは、前出のように3月18日に間庭が逮捕されたことである。手製の暗号の党員名簿などが発見、押収された。彼は捕まって、全部暗号から本名を翻訳してしまった。こうして四・一六全国大検挙が可能となったのである。そして700名が捕まった。これは同日だけの数字ではない。「四・一六事件では地下共産党の大物がほとんど捕まった。その点地上の党員のみを逮捕した三・一五事件よりもはるかに四・一六のほうが重要といわなければならない。ただ三・一五の名が世間に高かったのは、最初の共産党大検挙という衝撃が強かったためである。」⁽⁴⁾

治安維持法が1928年6月29日に改正されていたので、四・一六は、三・一五にくらべて、検挙がやりやすかった。全国的には、4・16事件の後、市川正一が4月26日に、鍋山貞親、三田村四郎が4月29日に、6月14日に佐野学が上海で、検挙された。こうして共産党幹部がほぼ根こそぎ捕まった。四・一六の方が三・一五よりも意義が大きかった。この日だけで捕まったものは全国で約700名だった。

その後1929年7月15日に、田中清玄と佐野博が中央ビューローを再建した。佐野はソ連から帰ったばかりだった。「武装共産党」といわれる時代が始まった。これが1年間続くのである。一方8月、宮本顕治が「敗北の文学」を発表する。1930年1月に、和歌山県で日本共産党再建大会が開かれて、

ビューローが作られた。

四・一六で捕まった小樽の運動家は、次ぎである。

風間六三 1907一，特要，4・16 に連座。1933 年 2 月 全協小樽地区協議会
準備会を結成。

佐藤 稔 1910一，思想要注意共産主義。4・16 に連座。

島田 勇 4・16 に連座。

島田清作 1901一，1928 年 1 月当時，労農党根室支部支部長。4・16 に連座。

小樽でも活動。北海道オルグ。

島田正策 1901一，4・16 に連座。札幌に移り活動。三菱石炭から保険外交
員へ。1937 年検挙さる。

広川広司 1905一，北海道。4・16 に連座。古物商。全日本無産者青年同盟
小樽支局員。

松本和三 1906一，静岡。全日本無産者青年同盟小樽支部員。3・15 に連座。
4・16 に連座。

森 良玄 1907一，野付牛。野付牛中学卒。小樽・樺太・福島で活動。4・
16 に連座。

(地名は，出身地。)⁽⁵⁾

島田正策は回想する。

「4 月 16 日といえば 私が青森・大湊の出張先から小樽の職場（三菱鉱業
北海道売炭所）に帰ったばかりの時である。匿名の電話があり，けげんに思っ
て受話器をとると，小林多喜二からだった。早口の跳ねるような声で，「島田！
お前か，ああ，無事でよかった！ 共産党の検挙が始まったぞ。お互い身辺
に注意しよう」

ぼくは小林多喜二より一足先に入党の申し込みをしていた。小林も入党を
希望していたが，かれは文学的才能があることから，入党より文学的活動の
方が効果的との党の判断から承認されていなかった」。

小林からの電話を受けてから4日後、4月20日朝6時、小樽市入船町にあった島田の家は、5人の特高警察官の急襲を受けた。

「妻と寝ていたらドンドンと戸をたたく音がするので、私がでると、『お前が島田か、水上警察までこい』といい、連行され、留置場に放りこまれた。ふと壁を見ると、いぜんの留置者の落書きでしょう。『共産党バンザーイ』と書かれてあってね。私も勇気づけてくれました」。

島田が入党を決意したのは1929年2月である。当時、東京から杉本文雄が党再建のオルグにきた。これと呼応し、小樽合同労働組合の活動家森良玄が島田に入党を勧めた。

「私の検挙は、私に入党を勧めた森良玄が、拷問にたいする恐怖から私の名前をしゃべったからであった……後に森をただと、党中央事務局に間庭末吉という記録摩があり、その記録に島田の名前があったから『隠しきれなかった』といっていた。私は拷問のさなかに『このままいくと、殺されるかもしれない』と恐怖を感じた。ふと小林にいわれた『いま党に必要なのは、捕まっても口を割らない天野屋利兵衛のような人だ』の言葉を思い出し、必死に党の秘密を守ろうとしたが、……あまりのひどさに天野屋利兵衛になり切れず、取調べの中で小林多喜二との関係までしゃべってしまった……。後に出獄したときに小林にすまないことをしたと思い続けた……」。

島田は「私は小林に、自分が弱かったと謝罪しました。小林は意に介さないといったふうに、『島田、今後がんばれよ』と激励してくれたんです。」

島田が、出獄後、就職で、運動はやる気かと聞かれて、「執行猶予の五年間はやらない」と答え、だめになった。多喜二は笑って、「俺なら運動なんかやらんと答えるよ」といって、島田の融通のきかなさを批判した。

こういうわけで、小樽では4日遅れて島田正策も連座した。その11月、懲役2年、執行猶予5年で釈放された。嶋田は、検挙前に小樽から札幌にすでに移り住んでいた妻の家族と、生活することになった。2、3カ月過ぎて、たまたま日本生命保険会社の新聞広告で外交員に応募すると、簡単に入社できた。2月の初めころである。

日本生命に就職してから、出獄後初めて、小樽の若竹町に多喜二を訪ね、話がつきないで、多喜二を札幌まで連れてきて、島田の南6条西9丁目の家に泊まってもらった。家が狭いので多喜二は自分から押入で寝た。

多喜二は言った。検挙されて、強がりをいって長い間拘置されるより、度を越さない程度に頭を下げて帰った方がよい、と。

島田は後で知ったが、多喜二も四・一六で検挙され、「蟹工船」の献上品で不敬罪に問われようとしたのを、その時は「悪かった」といって釈放された。⁽⁶⁾詳しく言えば、こうである。一二月、多喜二は島田に、「蟹工船」の不敬罪―献上品に石ころ、の文―に問われ、取調べを受けた話をする。「どうしても悪かったといわせようと仕向られて、結局、悪かったといっ、やっと帰された。無理に強がりをする必要はない。」と言った。

それから多喜二は、島田に、日本生命に就職したことについて「大資本の手伝いをするのか」と、厳しい批判をした。

翌日、4丁目の維新堂の前を通って、店外の台の上に並べられていた多喜二の「暴風雨警報」と林房雄の本を見た。嶋田が「どうだ」と聞いたら、「あまり売れていない。林〔房雄〕は作家同盟の規約に背いて了解を得ないで出版したんだ、金に負けたんだ、けしからん」と言っていた。

それから駅前をまっすぐに行き、北2条西3丁目に曲がって「ネヴォ」に行った。島田は始めてであった。多喜二は島田を待たせて、中に入った。やがて出てきて、札幌駅で別れた。多喜二と最後の別れであった。

多喜二は「ネヴォ」については何も話さなかった。雪の少ない年であって、この時雪が少しもなかった。⁽⁷⁾

島田は言う。多喜二の手紙は、たくさんあったが、四・一六事件で捕まった時に、同僚にあずけておいたところ、その友達もつかまって、その時焼いて、全部なくした。島田が獄中にいた時も、二・三枚葉書を貰ったが、それも見つからない。「外では運動が非常にすすんでいる」という意味のことだった。

伊藤整は言う。昭和四年は……日本の左翼文学の興隆期に続く危機にあ

たっていた……⁽⁸⁾私のかつての上級生小林多喜二は、左翼文学の「希望」からほとんど政治の「殉教者」になりかかっていた。⁽⁹⁾

1929年1月に、多喜二は、「ときどき特高刑事におびやかされている。銀行も長いことはないとは思っている。」と、手紙で書く。

1929年4月20日、家宅捜査され、多喜二は拘引された。だがすぐ帰れた。

2 銀行で

多喜二が作家として認められ始めたとき、銀行員として勤めながら知名の作家であることに、銀行は難色を示しているという話を〔小樽高商の教授〕糸魚川は誰からか聞いた。特高に追いまわされ初めた頃、妙見川筋でポツカリ彼に会った。青ぶくれのした元気のない顔をしていた。「どうだい？」と聞いたら「駄目です」というような意味の返事をした。⁽¹⁰⁾

仁木さん〔多喜二の家の隣人〕によると、多喜二と同じく神（かみ）さんという人がいた。じん、とも言われた。赤といわれ、警察に引っ張られた。

多喜二が拓銀支店在任中、彼と机を並べて仕事をし、「不在地主」の原稿整理を一切手伝ってやった織田ムメ子（昭和40年で、71歳）がいる。織田は、行員として調査課に勤めていた。多喜二より六つ上で、一度離婚していた。多喜二とは一年足らず、同じ課になった。隣の机だった。ひそかな行動を行内でただ一人知り、昼休みに喫茶店で書きつづける多喜二の行動を上役にしらさないようかばった。そして「不在地主」を清書した。

織田は言う。多喜二はそのころ「不在地主」を書いており、上司に見られないように苦慮していたが、「私は書籍や文書を積み重ねて見られないように計った。」

彼女は原稿整理を自宅に持ち帰って行なった。多喜二は2カ月で書き上げた。大急ぎの仕事だったことがわかる。それが出来上がった時、中央公論社から多喜二に原稿料五百円也が送られてきた。これを彼は全額母の名義にして定期預金にした。そして織田女には、丸井から態々錦紗の反物を買って御礼に贈ったのであった。彼女はそれを羽織にして大切に保存している。

多喜二は「人は本を作るが、本はまた人を作るものだ」としよっちゅう彼女に口癖のように言い聞かせ、次から次と本を貸してくれた。彼女にとっては、いずれも難解なものばかりなので、意味の分からない当時の新語やかたかな文字をノートに書き抜いて、多喜二に説明を乞うことにしていた。その度に彼は自らペンをとってそのノートに言葉の意味をやさしく説いて書き入れてくれた。こうしたノートも数冊に及んだ。彼女はこれも大切に保存している。

大野・高商教授は言う。

小林はまことに天分に恵まれた青年であって、文学的素質のみならず、絵にも、音楽にも、同じ程度の素質があった。そしてそれは彼自身も意識しており、一時はこの三つの方向の何れに進むべきかに迷ったのであったが、結局は文学を選んだ。その理由として織田女に語ったところは、「文学が一番金がかからないから」だったそうである。もし彼が絵や音楽に志を立てていたなら全く違った小林多喜二が生まれていたであろう。⁽¹¹⁾

拓銀での多喜二の同僚に、柴田徳秋がいた。彼は多喜二からその発表された小説を貰ったし、一部分は送ってもらった。それを大事にとっておいた。また多喜二にかんする新聞記事や、文学雑誌を切り抜いて、スクラップ帳を作っていた。このスクラップ帳は終生大事に保管していたのだった。⁽¹²⁾

多喜二はひょうきんだった。因藤荘助は云う。

昭和四年の夏だったと思う。そのころ貯金支局の事務員であった僕は友人のKと二人で拓殖銀行に勤めている多喜二のところに、「戦旗」……を受取りに行ったことがある。ちょうど銀行も仕事をしようところで忙がしそうだったが、小がらな多喜二はいかにも快活に素ばしつこい動作で窓口の行員達の間を、片手に書類をふりまわしながら、あつちこつち指図でもするようにかけまわっていた。ぼくらをみると笑顔で「小使室で待つてくれ」といつた。そこで裏口からだれもいない小使室らしいところで待つていると、間もなく多喜二はやつてきたが「ちよつと電話をかけるから」とそこの壁にとりつけてある電話機に向つて、元気な大声で電話をかけはじめた。するとその時、

給仕か事務員か、和服の若い女がやはり電話をかけによつてきて多喜二の側に終わるのを待つ姿勢で立っていたが、相手が出るのを待っている多喜二はその女に何か冗談をいゝかけたかと思うと、片手をのばして受話機を女の耳にあてがうようにした。女は笑いながらのけぞって体を引いた。小真面目な官庁の雇員であるぼくらはそんな多喜二を目を丸くしてながめていたものだ。⁽¹³⁾

同級生・桜井は言う。

左翼作家として名をなしてから私に対しては一度も思想的な話題や呼掛けをしたことはなかった。所詮度しがたき自由主義者と見たのであろう。しかし学校でも新聞社でも私の後輩であった寺田行雄が左翼に走ったのは多喜二の指導と影響が相当あったと今でも思っている。⁽¹⁴⁾

及川清先生〔小樽在住〕の叔母は、多喜二とともに拓銀に勤めていたが、よく「多喜二も普通の一人の男よ」と言っていた。⁽¹⁵⁾ これは重大な指摘である。

伊藤整はこう聞いている。彼は知人の間では、銀行員としても勤勉で有能なので、銀行では彼の思想傾向が分かっているがやめさせないという噂であった。⁽¹⁶⁾

3 佐々木妙二

佐々木妙二は、1903年、秋田県生まれである。多喜二は、高商で「一学年上だった。校友会雑誌の編集を一緒にやりました。」⁽¹⁷⁾ 「上級生多喜二の酷評がくやしくて 意固地に短歌をつくり続けた」。⁽¹⁸⁾

佐々木が「胸をわずらって二年休学して、学校にもどったら多喜二は卒業していましたが。私が、秋田師範で教師をしていたところ多喜二が訪ねてきた。彼は『不在地主』を書いているといっていましたから昭和四年（一九二九年）ごろではないかと思います。そのときお前の歌はだめだといわれたのです。その言葉が今になっても頭に残っています。それから私の歌は変わってきた。多喜二にいわれた言葉で一生を通してきた気がします。」

九〇歳の私に上級生多喜二が居る『君の生き方はそれでいいのか』

「身にこたえて多喜二をわかりはじめた時、教員の私の首が切られた」。佐々木は、七十九歳まで医者を開業していた。新日本歌人協会代表幹事、現代歌人協会名誉会員となった。おもな歌集は、『火芯』『限りなく』『生』『いのち』、評論集に、『現代語短歌への道』『現代語短歌読本』などがある。『民主文学』1992年新年号に「上級生・多喜二」という歌十首を発表した。

4 大月源二

多喜二の親友・大月源二は、1904（明治37）年、函館に生まれた。1908年、4歳で、父の事業の都合で、小樽の色内町へ、引越した。多喜二と似ている。大月は小樽で稲穂小学校に通い、全学年全甲であった。そして小樽中学で過ごした。

同一の学年が小林多喜二だった。

「一九一六（大正五）年四月に多喜二は小樽商業に、私は小樽中学に入学した。まもなく二人は水彩画を描くことで知り合うのだが、登校の時などよくすれちがった。汐見台の樽中の近くの坂の上から、顔をまっすぐにあげて、白いカバンを掛けた撫で肩をゆっくり振りながら降りてくる小柄の色白の少年——それが多喜二だった。」

「坂の多い小樽の町、当時はまだバスもなく、時間のないときは跳ぶようにして歩かねばならないこと、狭い道路に大量の積雪、舗装のない雪どけの泥んこ道、樽商と高商へ向かう緑町の「地獄坂」——これら客観的条件が彼の情熱的な気性に反映し、かれ独得の歩きぶりとなったものと思う。」（「多喜二と私」）

小樽中には白潮会、庁商には小羊会があった。校外に発表の場があり、互いに観客となった。

大月は、小樽中学2年で、「文章世界」にコマ絵を応募し、入選する。

小樽中学3年のころから、三浦鮮治の小樽洋画研究所に通った。そして画

家への決意を固めた。水彩画の多喜二と運命的出会いをする。

その間、伯父のいるウラジオストックへ旅行で行ったことがある。父が亡くなった。その後は、その伯父に東京美術学校卒業まで学費を出して貰うことになった。

小樽中5年の時、同級の武田暹らが『群像』を発刊し、誌名は大月がつけ、時々表紙絵を描き、詩も発表した。

大月は、1921年に、美校入学に失敗し、小樽の川端美術学校に通った。翌1922年に東京美術学校に入学し、藤島教室に属した。同期に猪熊弦一郎、小磯良平などがいた。この間、またウラジオストック旅行をしたことがある。夏休みには小樽に帰ってきた。多喜二にももちろん会った。

1923年に、松山文雄と交遊が始まり、1924年に須山計一と知った。

1924年、小樽に三浦鮮治を中心として太地社が結成された。小樽洋画研究所の発展的解消である。大月が名付けた。

1925年の夏、美校四年の大月が、小樽の北海製缶工場をモチーフにして油絵を描いていた色内の、義兄の家に、多喜二は訪ねてきた。('小林多喜二とのつきあい') これは「製缶工場と若者」で、第1回道展に出品した。

1927年、山東出兵がなされた年、大月は美校を卒業した。卒業製作に「新しい生活」をだした。思想的傾向をもった作品が美校の卒業製作に現れたのは初めてであった。大月は、卒業後、すぐにプロレタリア美術運動に入った。島崎や、小樽出身の稲垣小五郎（目黒生）らと、「赤道社」、つまりマルクス主義的美術集団を結成した。これは数カ月で解消し、日本プロレタリア美術連盟美術部（AR、プロ芸）に、全員で加入した。AR部長は橋浦泰雄だった。彼らは、プロレタリア美術をめざす1925年結成の『造型美術協会』——岡本唐貴などが属する——でなく、プロ芸を選んだのだ。

東京で大月は、恵まれた伯父の家にいたが、プロ芸の事務所の二階に移った。そこは多喜二も訪ねた「合宿事務所」だった。小説家中野重治、鹿地亘はじめ、十数人と起居を共にする。その後、大月は本所柳島のアパートへ移った。

1928 年に、労働農民党選挙ポスターをかいた。その 3・15 検挙で、25 日間勾留され、特高の激しい拷問を受けた。

この 1928 年、多喜二が上京して 5 月に、大月に会い、二人で語り合った。(拙稿「東俱知安行」を書いたころ」参照) 多喜二は、「善作に会ったらね、『源ちゃん近頃東京で跳ねて歩いている』と言ったんで、おれ腹が立って、腹が立って……」と言う。

大月が書く。「善作というのは私の少年時代の絵の先輩であり、多喜二が中央の文学雑誌に投書したコマ絵の先輩である中村善作氏のことである。多喜二は自分のことのように腹を立てたのだろう。私も一瞬「跳ねて歩いて」にひっかかったが、美校生後期以来の私のはげしい「転換」の諸相が、善作氏の遠くから見た眼には「跳ねて歩く」ように見えたのかもしれないと苦笑した。」(「多喜二と私」)

大月は、上京した多喜二が、「合宿事務所」の大月を訪ね、久しぶりに語り合った 1928 年 5 月のことを、「もともと美術と文学との接点の上に形成された二人の友情は、いまやさらに政治への競ってがこれに重なることで新しく築き直されることになった。」と書く。(「小林多喜二とのつきあい」)「政治上の接点」とは、二人がプロレタリア解放運動に同じように加わっていることを確認し合っている言葉である。

多喜二が大月を訪ねたのも単に幼なじみの懐かしさからではなく、大月が同じ道を歩み始め、彼の住んでいるところが若いプロレタリア芸術家たちの「合宿事務所」になっていることを知っていて、訪ねたのだった。⁽¹⁹⁾

蔵原惟人の「プロレタリア・リアリズムへの道」(『戦旗』1928・5) 論文が出て、多喜二も大月も影響を受けた。

大月は、多喜二の「一九二八・三・一五」の挿絵を描いた。その後、「蟹工船」(『戦旗』)の挿絵をかき、「蟹工船」単行本改訂普及版の装丁をした。

1929 年、山本宣治⁽²⁰⁾の遺骸が横たえられた東京・神田の旅館にかけつけて、コンテでスケッチし、これは、「同志山本宣治死顔スケッチ」(『戦旗』4 月)として発表された。また、本郷の仏教青年会館での山宣の葬儀を、代表

作「告別」で描いた。

矢部友衛も、山宣争議を、「労働葬」で描いた。

大月は、1929年1月、ナップ中央協議員となった。4月に、AR(=日本プロレタリア美術連盟美術部、プロ芸)と「造型」との合同大会があり、「日本プロレタリア美術家同盟」となり、大月はその中央委員となった。1930年に、大月は、検束・留置された。⁽²¹⁾

5 昭和4年の状況

1929年は、前出の4・16事件が行われた。7月に浜口内閣が成立し、多くの汚職・疑獄事件が発生した。一方、日本では、金解禁、つまり金本位制復帰がなされた。水野成夫、南喜一らの第1次集団転向が起きた。10月には世界大恐慌が起きた。

1929年5月に発売された「東京行進曲」は、40万枚売れ、空前の大ヒット曲になった。佐藤千代子が歌った。『キング』に連載された菊池寛の原作で、溝口健二監督が映画化し、西条八十作詞・中山晋平作曲である。この歌から時代が変わった。

昔恋しい銀座の柳 仇な年増を誰が知ろ
ジャズでおどって リキュルで更けて
あけれや ダンサアの なみだあめ

佐藤は、小樽出身(1897, 明治43年—1968, 昭和43年)で、稲穂町に生まれた。庁立小樽高女を卒業し、東京音楽学校に進学し、クラシックを学んだ。中山晋平に見出され、「船頭小唄」、その後、昭和7年「涙の渡り鳥」、「旅のつばくろ」などを歌った。ラジオ歌手第1号であり、流行歌の黄金時代の立て役者となった。⁽²²⁾その後、ミラノへ留学し、本来のクラシックへ戻った。

6 瀧子との再会

その半年後、1927年5月28日、田口瀧子は小野病院から姿を消した。その理由は、多喜二が瀧の男性関係を知り詰問したことである。ヤマキ屋の息子とのことだった。⁽²³⁾ 瀧子はまず室蘭へ行き、まもなく札幌へ行き、その後2年ぶりで小樽に戻り、中央ホテルで⁽²⁴⁾ 働いた。1929年5月14日に多喜二は2年ぶりに瀧と会えた。この2年間、多喜二は全く瀧子と会えなかったのだ。

多喜二と瀧子は独立した人格として、それ以来時々会った。

「小樽の中央ホテルで働いていた田口は、経営者からも信頼され、収入もよかったが、しかし彼女は将来独立性のある技術を身につけることを望んでいた。それは一つには、貧しい、弟や妹たちの支えになる用意でもあったが、また多喜二とともに暮らしていくひそかな心構えでもあった。彼女は多喜二と相談して、東京で洋髪の学校に入学することをきめ、月づきの収入のなかから東京行きの費用を積み立てていた。」⁽²⁵⁾

7 多喜二のかかわり

小林多喜二は、磯野小作争議⁽²⁶⁾ を小説「不在地主」で描いた。

小林多喜二はこの争議事件に、どういう態度でいたのだろうか。もちろん文学修行が最大の関心事であった。彼はすでに1924(大正13)年3月に小樽高商を卒業し、北海道拓殖銀行に就職していた。だから卒業後ちょうど3年目で、この事件に会った。

彼は3月14日の地主糾弾の第2回目の演説会に行こうとした。彼は日記に書いている。

「磯野進の小作争議の演説を聞こうとして行ってみたところ、何十人という巡査が表に居り、入場を拒絶している。外では沢山の人達が立ち去りもしないで、興奮し、官憲とブルジョアの横暴をならしていた。一労働者のようなもの、口から『搾取』などという言葉が常識のように出ていた。時代が進んだことを思った。皆目覚めているのだ。自分も興奮して帰ってきた」⁽²⁷⁾

その後かれは、北海タイムス小樽支社に勤めていた寺田行雄の紹介で、争議の中心的指導者の1人だった武内清の求めに応じて会い、彼の依頼を受けて、拓殖銀行で収集できる磯野側の情報を提供する役を引き受けた。⁽²⁸⁾

彼は、小作人代表 伴や阿部に会っていた。

昭和2年になると、多喜二は小樽の労働組合とつながりをもつ。大正14年の10月に、小樽高商で軍事教練反対闘争をやって、庁商・高商ともに多喜二より一期下の寺田行雄の紹介で、彼は、労農派の理論家の古川友一と知り、そんな関係で小樽の組合ともつながりができた。当時の小樽合同労働組合は、武内清——昭和23年10月に死んだ——が指導していて、3月には小樽の不在地主磯野進の下富良野農場で小作争議が起こると、これを応援した。

多喜二は島田正策に会って、

「夕べ稲穂町の説教所で小作争議の演説会をやっていた。聴きにきた労働者が一杯あふれて、そこえ警官が並び物凄かった。弁士が一言しゃべるとすぐ、中止を命じ、次の弁士がその続きをしゃべるといった具合で、農民の問題にあんなに動員されるんだから矢張り労働者はちがったものだ」といった。⁽²⁹⁾

8 『中央公論』と

雨宮庸蔵は、明治36(1903)年、山梨県生まれで、昭和3年9月、中央公論社に入社した。昭和4年7月、雑誌『中央公論』編集長となり、名編集長として知られ、とくに谷崎潤一郎の数々の名作を送り出した。昭和13年、『中央公論』が石川達三の「生きている兵隊」掲載のかどで発禁となった責任をとり、退社した。

雨宮は述べる。

中央公論は、ともかく論説欄にしても中間記事にしても創作欄にしても根本的に変えなくてはならないと痛感して、それとなく編集会議の時に、(雨宮は)言った。この際中央公論は時代を先取りしたようなものを、ともかく論文でも創作でもいい、ともかく載つけてみる必要があると痛感して、当時プロレタリア小説が時代の脚光を浴びていたような時だったから、これを一つ

利用して見ようと、思った。

そのとき、プロレタリア小説としてとにかく取り上げる値打ちのあるものは、二つしかない。それは徳永直⁽³⁰⁾と小林多喜二、この二人だけがいわゆるプロレタリア小説として見どころがある、利用するに足りると、確信した。

しかし、それではどちらを採ったらいいのか。すでに徳永は 長編「太陽のない街」によって時代の脚光を浴びている。ドイツ語にまで翻訳される。海外にまで知られている。しかし徳永君はこの小説を書くために持ち合わせていた材料は、ほとんど使ってしまったと、私は思った。だから、徳永君はこれ以上小説を書くにしても、そのときの残りの材料を使って短編でも書くよりほかはないと思った。だから、これから取り上げるとしたら小林多喜二君よりほかはないと思った。

小林君の方は、やはり子供のときに非常に貧しかったことから、自らは作家を希望しながらも、その題材は労働者なり農民なり、とにかく貧しい人々から材料を採ったと思う。

しかし小林多喜二を採ることでは、そこに二つの私の標準があった。それは第一に小林君は単なるプロレタリア作家ではない。この人はもともと作家希望である。作家としてとにかく大成しようという野心に燃えている。たまたま貧乏であったために、プロレタリア小説にこだわっている、と思った。つまりこの人は作家をもともと希望していたこと、それが一つの力であった。

そしてこの作家志願という点が、私が小林君を時代先取りの場合の中央公論の候補者としてあげたいことだが、もう一つ、同時に私は彼が決して共産党員ではないということを確認した。共産党員であれば、私はいかに彼が作家志望の念願を燃やしている人であったとしても、中央公論で大々的に採用することはしない。何故ならば彼の小説を取った場合に、中央公論としてはこれに対して原稿料を払うわけだが、もし共産党員であるならば、小林君に渡った原稿料はあるいはそのまま共産党の方に流れるかもしれない。そうすると、中央公論は共産党のシンパであるという誤解を受ける。⁽³¹⁾ そういう点を警戒し、私は小林君が根っからの作家志望であることと、断じて共産党員

ではないことを確認したうえで、小林君に長編小説を頼むことを、編集会議のときに提案した。

小林君に頼むにしても、その長編小説は中央公論の創作欄をそれによって埋めてもいいくらいの覚悟をして、頼んだらどうかと、思った。これによって時代の先取りをする、という念願は達せられる。それは中央公論が起死回生、よってこれから言論界に雄飛する一つの足場になると、信じた。

編集長などからしたら、せっかく谷崎潤一郎⁽³²⁾さんからの原稿は来ている、それも「三人法師」の半分がきて、後の半分はやがて来ることになっている。これによって中央公論の長編創作欄を飾ることは当然のことであり、それに編集長たちが執着を燃やすことは、中央公論の伝統としては王道である。しかし今、実は私はそうしてはいられない。そしてどうせ小林君の小説だから、題材は労働者、農民などを一方に置いて、一方には資本家、銀行、金融資本家、地主というものを置くことになるので、作品としては一般の興味を引くようなことは出来ないかもしれない。しかし時代の先取りをする意味ではこうした題材も仕方ない、これは一応目をつむっていただかなくてはならない。そしてこれをぜひにと思って皆さんにお願いした。

そのとき社長（嶋中）は、よし、ひとつやってみようじゃないか、という発言があった。これを聞いた編集長はまったくびっくりして、普段からの思いも鬱積していたのでしょう、それはまるでアクロバット編集である、とはっきり言った。これに対して嶋中さんはまったく怒ってしまった。握り拳を握って、よし、それなら雨宮君を編集長にする、と言い出した。私もびっくりした。他の先輩たちもびっくりしたでしょう。それで私は社長に、私はそんなことで小林君を一生懸命推薦しているわけではない、私が編集の責任者になるということはまったく思いもよらないことで、そんなことはもちろん考えていないので、どうかそのところは誤解のないようにくれぐれもお願いしますといって、そのところは一応収まったが、編集長としては、どうしても谷崎さんの「三人法師」にこだわっており、小林君みたいな若造にそうした創作覧を埋めてまでも長編小説を書かせることはまったく思いもよらぬこ

とだった。

もちろん、その文章においても、文芸としての作品においても小林君のものが谷崎さんに遠く及ばないということは、私にも解っている。充分承知している。そしておそらく小林君として、その題材としては労働者、農民、地主、資本家というところを代表として筆を進めるのでしょうか、これは大目に見なければならぬ。小林君の、労働者農民と資本家地主という関係についての社会的分析は恐らく精気を極めると思うが、しかしこれは小説の本道ではない、こういったものは社会経済評論家の手に委ねることであり、小説の作品としての本道ではない、そのことも私は十分に承知した上で、これを小林君に頼もうとしている。

注意しなければならないことは、小林君がそうした労働者、農民、資本家、地主を描いた場合に、その普遍的な人間性がしっかり据えられて、それが極めて正確な正しい表現で文章にされるかどうか、さらにその文章は願わくば美しい文章でなければならない。この点を私は十分注意してその作品が出来上がった場合には、批判的に見ようと思う。これが十分に出来ていないようであつたら、作品としての値打ちはないので、やめるよりほかはない、それくらいの覚悟で私は臨んでいる。このことは小林君にもしも頼むとしたら、十分に念を押しておかなければならない、ということも考えている。

しかし、いずれにしても、小林君を採用する、登用すること自体が、しかも長編小説でこれを雑誌に載せることは、まことに冒険ではある。だから私はこれが文芸作品として果して承諾できるかどうか、つまり普遍的人間性を正確に捉えられ、そしてそれができれば美しい文章によって表現されることができかどうか、まことに我々谷崎さんの文章なり、島崎藤村の文章なり、あるいは志賀直哉の文章なりに親しんで、それを高く評価しているものにとっては、小林君の作品を大きなスペースを割いて載つけることはまことに乱暴であるかと思う。そういう風に見られても仕方ない。

しかしともかく中央公論はこういった時勢でともかく時代の波を切ってこれに乗り越えて願わくばリードしていかねばならない。そのためには先ず時

代の先取りをすることが絶対に必要であり、その意味でここに小林多喜二君の長編小説を採ってみようということになったので、そのへんはどうぞ編集長だけにご理解を願いたい。もし成功できなかつたら、どうするつもりかと問われればまことに困るのですが、私の注文通りに小林君がやってくれるならば十分時代の先取りをして、そして中央公論が起死回生、このままでは中央公論は眠ってしまうより他はないので、必死に願っている。

私はこの場合、小林君にしっかりこちらの旨を含んでもらってやったら、彼にできないことはないと思う。作品が文芸作品として十分成功するかどうか、これはできた作品を採ってみなければわからないが、私は彼は十分にやってのけられるのではないかと思う。ともかく彼は作家としての大作家として成功したいという野心があり、これははっきりしている。だから「不在地主」、後にできた題名だが、そういう長編小説を書く場合に十分に心得ているのではないか。また志賀直哉に心酔している点から見ても、非常に文章に苦心してその出来上りを一生懸命考えてやってくれるのではないか。

しかし、それにしても頼むときには十分その辺をくれぐれも念を押して私は頼みたい。それが作品として出来上がった場合に成功していないとすれば、何度でも書き直しをして貰えばいいし、それがあんまり年月がかかることがあったら、そのときは考えてもいい。……私の想像としては、これが成功した場合には中央公論の声価は一段と跳ね上がり、部数も十分期待できるのではないか。……

そして私は皆さんの非常な懸念もあったが、社長からの勇断もあり、小林君に原稿を頼むことにした。中央公論としてはまことに破天荒なもので、君もしっかりやってもらいたい、と私はくれぐれもいいたい。……

小林君からは、もう必死の原稿を持ってご期待に沿いたいと思います、という返事は貰いました。……あとは小林君の原稿を待つだけのことになった、小林君は期日を間違いなく締切に間に合うように、その原稿は送ってよこしました。枚数をこちらでいったように、きちんと守り、そしてその態度は、

私は手紙を見て、実は安心していた。そして期日通りに小林君から原稿が届いた。……⁽³³⁾

9 テーマの由来

中央公論から原稿依頼があったとき、多喜二は武田暹に、「防雪林」という題はどうだと、相談をもちかけた。何も読ませないで聞かれても、と武田は思った。それで、「自然主義的で、古い題だね。」「ちょっと古くさいなあ」って言った。

考え込んでいた多喜二は、「じゃ、不在地主という題はどうだ。」という。不在地主という言葉は、武田はまったくの初耳で、その時は何のことやらわからなかったけれど、「うん、これはいい。立派な題だ、とにかく科学的で新しいよ。不在地主にしろよ。」「そうか、そうするか、じゃ不在地主に決める。」

それから武田は多喜二に一席講義された。

多喜二は、すでに「防雪林」を書いていたはずである。これと同じ題名にしようと初め考えていたのだろう。

10 文学の大衆化

藤橋は言う。あれはいつだったか、雪の降る中、1時か2時までビヤホールかで、多喜二らと飲んでいた。武田が、「プロレタリア新内をやるのか」、と言う。それで藤橋が調子に乗って、「プロレタリア浪花節でも書けばいいんでないか」、と言ったら、多喜二は、「そうかなあ」、と考えこんでた。そしてそのまま帰っていった。まじめだなあ、と藤橋は言う。あのころ、新内の家元、岡本文弥が、プロレタリア新内をやっていた。それで藤橋がひっかった。⁽³⁴⁾

このころ、プロレタリア文学の陣営では文学の大衆化という課題が出されていた。多喜二もこれを具体化しようとした。『不在地主』にはその努力のあとがある。

11 執筆

多喜二は、1929年に、雨宮庸蔵（中央公論）あて手紙で、「不在地主」の進み具合等を書いている。6月23日に書く、「今度も、第三作としては十月頃迄かゝって、北海道の農村を背景にしたスケールの大きい、百七、八十枚から二百枚近いものを作る積もりで、取り掛かろうと思っています。」「貴方の方の雑誌にも是非書きたいと思っていますが、……無責任なものを書き飛ばしたくない……若し、その長いものでもいいと云うのなら、勿論、『一九二八・三・一五』『蟹工船』以上のものにして、お送り出来ると信じています。』⁽³⁵⁾

次いで7月1日には「勿論死力を尽くしても、立派なものを作り」「意図としては、日本在来の、又日本プロレタリアの『農民文学』に対して、断然新しい道を示すものであることを信じていますが、その意図がどの位迄成功するか。益、責任の重さを感じます。

私は、私の『良心的』な立場としても、私の『責任』としても、中央公論の立場としても、厳密に、それに値しないものであったら、私はその作品を百度でも改作するか、投げ捨てる積りです。』⁽³⁶⁾と、大変な決意を続けている。

7月9日には、「私も相変わらずやって居ります。時間がなく弱っていますが、とにかく御期待にそむかないものにしたい、一生ケン命やって居りますから、御安心下さい。』⁽³⁷⁾

8月30日には「十一月号の原稿は、仕事も捗り、確実に九月末日迄に御送り出来ますから、御安心下さい。枚数は、百八十枚から少しの相違はあること、思いますが、十枚か二十枚位の筈です。」「とにかく全力をつくしたものであり、自分としては、その報いられたものと思っています。』⁽³⁸⁾

9月10日、多喜二は突然、調査係から出納係へ変えられた。

藤橋は書く。

『不在地主』を書いた直後ぐらいだった。多喜二が為替係から計算の方に仕事が変わって、藤橋が行ったら、前の日通飲したとかで頭の具合が悪い、これからアイスクリーム探しに行こうと言う。6月だ。あのころは今と違っ

て、まだ出ていない。そして口のまわりをメタポリンの粉で真っ白にしていた。二日酔いで休むということはなかった。⁽³⁹⁾

嶋田と多喜二はよく本の貸し借りをしていたが、時々その本の中に原稿の1部と思われる文章を書いた紙片がはさまっている事があった。銀行の執務中にも思い付いた事を書いていたのであろう。⁽⁴⁰⁾

9月に原稿を送った後、多喜二は書いている。

「約束より一日遅れ、枚数も三〇枚も超過し、申訳ありません。然し、力一杯の作品になった積りですから、そのことで、埋め合わせて頂きたい思います。」

彼はこの作品の意図を4点挙げている。

「A. 私はあの作では、何より『資本主義が支配的な状態のもとの農村』を描いたということです。そしてそのもとでは、当然、地主のブルジョア化⁽⁴¹⁾の過程、人魚のように、上半分が地主で、下半分が資本家——即ち、「不在地主」の形態をとるということです。

そして、『不在地主』に触れるということは、又必然に、『地主と資本家』『農村と都会』の関係を、最も尖鋭化した形で、触れることである。……農民文学に於けるこの意図だけで、自分は自惚れてもいい、程の自信を持っています。」

「B. 農民文学は、在来、単に、小作人の惨めな生活(日常の)ばかり描いていた。私は、この作では、「農民と移民の関係」「青年訓練所と農民」「相互扶助会と農民」「銀行と農民」「軍隊と農民」「徴兵と農民」……このようなスケールで触れている。小作人と貧農には、如何に惨めな生活をしているか、ということが問題なのではなくて、如何にして惨めか、又どういう位置に、どう関聯されているかゝが、(彼等自身知らずにいることであり、) それこそ明かにしなければならない第一の重大事であると思う。

この限りでは、私は能う限り暴露していると思っている。

C. この一篇のそして基本点は、「農民」と「労働者」の協同を描いたという点である。——不在地主が資本主義下の典型的形態たらんとする時、この、闘

争形態が必然に、今後支配的なものになるし、そうなるようにさせなければならない。その意味で、この作品はたゞに芸術的な意義ばかりでなしに、そこに具体的、政治的意味もあること、と思っています。

かゝる方面を取扱った、最初のプロレタリア作品でないか、と思っています。」

原稿を受け取った雨宮は、こう書く。

その原稿を見ますと、実に字はきれいではっきりして、本人の真面目な性格がよく出ていると思いました。そして前編を読んだところ、かねての想像通り、初めの方は現代社会の機構について精解を極めた分析がありますが、これは小説としては何ら価値がないといったら語弊かも知れませんが、小説としての評価には別に関係しないもので、社会経済評論家によって明かにされればよい……だから小林君が、その問題について精ちに書いてきたとしても、それはただ一応それだけの、小説の中の一部の事柄として、あまり重要視しなくてもいい……

そして最後まで読みましたら、やはり私が懸念したように、いろいろのことを述べたあとで、最後の締めくくりの文章は、結局争議に持って行ってしまう。争議、これはプロレタリア作家にしても、その作品にはいつも革命とかの文句もあり、一流の批評家にしても、左翼関係の人はそういうことを言わずにおれないので、これは私たちから見れば大人気ないが、それは仕方ないことだ。ただ、それが、小林君の小説の場合に、検閲の方の人たちがどのような目でみるか、私が見たところでは、小林君の争議に関する部分は、別にそれ自体としてなんら差し支えがないものだと思うが、この色々と書いてきた後に争議を持ってくる。そしてそれを検閲官はどのように受け取るか、これがもし一種の革命ののろしととられると、これは大変でして、この辺の兼ねをいったいどういうようにしたものでもいいか、それが編集者としての実は悩みです。……これを革命の烽火として検閲官が見た場合には、発禁にならざるをえない。それはまことに編集者としても迷惑なことですから、これは十分に気をつけねばならない。そんな風の関係で、私は大事をとって……、

一応これは全部削除するという方向で、この原稿は雑誌に載せることにした。勿論、このことは、作者としては心外でしょうし、私としても本意ではないが、もし発禁にでもなったら、それこそ目も当てられない。……

そしてそれを掲載したのですが、やはり予想通り大変な、この世論の動きを見て、十分に成功したと思う。とにかく中央公論はここまでやったかということで、世の中では言論界がこれを括目して見たし、今後の中央公論の行き方に対し皆目を張って見るようになった。

小林君を採り上げて、「不在地主」を世に問うた、ことによって、中央公論の声価は上がるに至った。とにかく編集長のいろいろの思惑、社長の勇断もあり、これは一応成功したと見ねばならない……。⁽⁴²⁾

12 西野の批評

西野辰吉は、『不在地主』の弱点を指摘している。

まず、小説の登場人物で、彼・西野は農民組合のオルグ荒川の話を取りあげる。「荒川は硫黄でインキのように真黒になっているお茶を飲みながら、内地⁽⁴³⁾の農民の話をした。」その話はこうである。「内地では、小作争議で『ドンツキ』をやる。小作人が地主を無理矢理ひっぱってきて、逆さにするして灌漑溝の水につけたり、上げたりする。然し北海道のように小作と一緒に住んでいる地主がいないので、『残念ながら、ドンツキは出来ない』」。

これにたいして西野は言う。地主が遠い場所にいるということは闘いにくい条件のひとつであるかもしれないが、しかし地主が村にいることも決して闘いやすい条件ではない。作者は、地主が村に住む内地の農村に前近代的人間関係と習慣的日常的支配秩序がどんなに重苦しい抑圧をつくりだしているかという現実を知らなかったのである。「ドンツキ」の話は、「小林の空想した発明ではなく、おそらく労働運動のなかまから聞いた話だったろう。その昭和初年代は集団のなかでの認識がたしかめられもせず容易に個人の認識になってしまうような心的状態を、その運動はもっていたのである。」

「『不在地主』はひじょうに粗雑な小説で、多くの欠陥が眼につく。たとえ

ば、」主題にとって重要な搾取の問題が、『移民案内』や村から都市へでいった青年の手紙などで、搾取一般、貧窮一般として概念的に説明されているだけだし、小作料減免を要求して争議がおこなわれることになるが、小作人がわがどの程度の減免を要求したのかということも、書かれていない。

そんなふうに小林は北海道の農村についても浅い知識しかもっていなかったようだ」。(44)

西野の批判は偏っているし、粗雑である。

ドンツキの例は、多喜二がドンツキは北海道ではできないと言っているだけである。地主が在村していたほうが闘いにくい面を書かなければならないと言うのであれば、それは学術論文の仕事である。むしろ問題は本当にドンツキがよくやられたかどうかを調べた方がよいだろう。

集団のなかでの認識が確かめられずに個人の認識になった心的状態も、それは運動の欠陥、当時の労働者運動の欠陥である。この小説の欠陥とするのは場違いである。

「移民案内」は、もちろん搾取の説明の為に使われているものではない。どの程度の小作料減免かが書かれていない、というのは、その通りである。何割をか、という数字のことであろう。すでに述べたように多喜二は農場ではないが小樽の小作争議に参加していたので、よく分かっていたであろう。また富良野まで行って調べたので農村の状態を少しは知っていたであろう。具体的な数字を入れるか入れないかではない。入れなくてもよい小説は書ける。問題はリアルに書かなかった点が少なくないことである。その点でかなり欠陥があることは、西野の指摘の通りである。多喜二は農民生活をしたことがなく、都会での学生・銀行マンとしての経験しかないから、北海道の農村について浅い知識しかないかもしれない。

「不在地主」の欠点は、実は全く他の所にある。まず、かなりの部分が綿密にかかれているにも拘らず、一部分が粗っぽく書かれている。もう少し時間をかけて、丁寧に書いてもよさそうだ。次に、争議が発生する時と、農場から小樽へ争議が移る所、その2つの印象が薄い。この2つをリアルに、もち

ろん現実に即してではなく、現実らしく描けば、完成品である。最後に余分な事であるが、作者の意図の実現の点から言えば、労農提携の印象深い叙述が必要である。

これは、『中央公論』が持っている当時の地位によっている。『中央公論』は、小説でいうと、当時最も高名な雑誌であって、ここに小説が乗れば、一流作家として認められた。中央公論作家というあだ名さえあった。若年の小林多喜二が、中央公論から原稿依頼がきて、どれほど喜んだか、驚いたか、想像もできないほどである。その大雑誌に書くためには、努力を惜しまなかったが、残念乍ら、時間が足りなかった。そして多喜二としては、大出版社の依頼に対して、締切をしっかりと守りたかった。むしろ締切を破ることなど思いもよらなかった。そのため、彼はかなり粗雑な所を残して、原稿を仕上げたのであった。

彼の小説、「三・一五」「蟹工船」に比べて、「不在地主」は、後半が粗雑である。締切を少し越えてもいいから、きっちり書こうと思えば、前2作のように書けたであろう。しかし若く新進の多喜二としては、そんなことはとても考えられなかった。その上、多喜二は、未公表の「防雪林」から、初めの3分の1を、ほとんどそのまま持ってきて、「不在地主」の中へ放り込んだ。

13 雨宮と多喜二

雨宮は書く。

小林多喜二君の長編を中央公論に掲載したことが大成功に終って、それが一段落したころ、小林君が上京してきて、中央公論に私を訪ねてみえた。そして、大きな新聞広告を見て何か自分が大家になったような錯覚を起こしました、と笑っていたが、とにかくありがとうございました、と一応挨拶されて、ただ争議の部分を削除された、ということは、こちらの立場も理解はいたしますけれども、実は本当に残念でした。ただ私はあの割愛された部分についても原稿料はいただいている、そうするとあの部分は私の手を離れて中央公論社のものとなっている、そうすると、中央公論社として、私があれを

お借りしたいと思っても、それは一体貸していただけるのかどうか非常に不安で、実はそのことについてはっきりしたくてまいったのであります、そして、実は削除された部分をほかの雑誌に載せることを、ほかの雑誌と申しましても戦旗でありますけれども、それを許していただけるかどうか、実はそれが悲願だったんです、もし許していただけなかったらどうしようかと思つて、実際心配だったんでありますが、というから、いやそれは、あなたには大変失礼だったが、……大事をとって削除したわけで、あなたの気持ちもよく解りますから、それは私のほうではお貸しいたします。そうしたら [多喜二は] 非常に安心して喜んで、それを私は戦旗の編集部の方へ伝えますから、戦旗の人が来たら、よろしく願ひします、ということだった。けどもせっかく上京されたことですし、飯でも一緒にどうですか、いやいやそれは急ぎますから、ありがたいが失礼します。お茶でもどうですか、といったら、それも、とても急いでいますから失礼します、ただ私は、私を採り上げてくださったことへのお礼の挨拶と、それから削除された部分を拝借できるかどうかということで実はお伺ひしたわけですから、それがもう用件が達せられましたら私はすぐ帰ります、ということで、非常に私は残念だったが、少しぐらい話をしたいと思つたが、彼は急いで帰った。⁽⁴⁵⁾

14 その後

『中央公論』昭和4年11月号に、「不在地主」が発表されて、好評であった。

多喜二の小樽時代に、「不在地主」が、プロット、東京左翼劇場により、小野・島の脚色で、市村座で、上演された。

1929年(昭和4年)7月26日から31日まで、帝劇で「蟹工船」が、高田保、北村小松、両氏の脚色で、新築地劇団で上演されることになった。

昭和5年の劇「不在地主」は、多数の削除を受けた。

1931年の春、多喜二の東京時代、東京の武蔵野町吉祥寺の江口渙の家で作家同盟中央委員会がよく持たれた。その後、雑談で江口は多喜二に話しかけた。

「きみの『不在地主』に、石狩川をポンポン蒸汽がのぼってくると子どもが多勢土堤の上で手を叩いてはやすところがあるね。あそこが一ばんうまいと思うな。ただし作者はどう思うかしらないけど……」

「作者も多分そう思うだろうよ」

こういふと 小林多喜二はいかにもうれしそうに笑った。それはまさに会心の微笑ともいふべきほどの微笑だった。⁽⁴⁶⁾

- (1) 第1次共産党解党後、再建ビューローの中央委員。当時27歳。この際の重要文書を彼が預かっていたが、それを警察に押収された。この時点からスパイだった容疑が強いという。ウラジオストックで組織宣伝活動をした。市川とともに帰国した。中間検挙後、再建された中央事務局員。3月28日に捕まる。4・16以後、スパイとして除名され、獄中で悶死する。
- (2) オルガナイザー（組織者）の略。
- (3) 松阪、38ページ。
- (4) 松本清張、286ページ。
- (5) 堅田。
- (6) 下里『日本の暗黒 第3部』192-4ページ。
- (7) 島田の稿、『ネヴオの記』。
- (8) 『伊藤整全集』23巻、220ページ。
- (9) 同、221ページ。
- (10) 『緑丘』通巻42号から、糸魚川の稿。
- (11) 大野純一稿、『緑丘』。
- (12) 彼は死ぬ前、これを小樽文学館に寄贈した。
- (13) 因藤荘助「多喜二のプロフィル」（『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年）
- (14) 桜井長徳「よだれをたらす多喜二」、主に後半部分、『小樽商大緑丘』250号。実際は反対で、寺田行雄が多喜二に影響を与えた。

- (15) 小生あて及川手紙, 2000.5.1。
- (16) 『伊藤整全集』23 巻 昭和 51 年 265 ページ。
- (17) 『赤旗』1992 年 1 月 25 日。
- (18) 『民主文学』1992 年 新年号。
- (19) 金倉義慧『画家 大月源二』創風社 2000 年, 28 ページ。
- (20) 山本宣治は, 京都・宇治の旅館 花屋敷の 1 人子として生まれた。「生めよ殖やせよ」の国策に反すると圧迫されながらも, 産児制限運動に取り組んだ。
- (21) 金倉義慧。
- (22) 『小樽の女性史』1999 年, 176 ページ。
- (23) 拙稿「小林多喜二の恋」(『人文研究』90), 「小林多喜二とフェミニズム」(『世界文学』78) 参照。
- (24) 現在の「ホテルニューみなと」の所。
- (25) 手塚, 下, 29 ページ。
- (26) 拙稿「不在地主」上下(『商学討究』48 の 4, 50 の 2・3) を見よ。
- (27) 『小林多喜二全集』第 7 巻, 新日本出版社 1983 年, 108 ページ。
- (28) 手塚, 上, 138 ページ。
- (29) 島田正策「小林多喜二のこと」(『小林多喜二読本』) 236-7 ページ。
- (30) 徳永(1899-1958)。1926 年の共同印刷争議で指導的メンバーとして活躍し, この体験に基づいて長編小説「太陽のない街」を『戦旗』に発表した。
- (31) 治安維持法によるからである。
- (32) 谷崎 (1886-1965)。後に文豪と呼ばれる。この当時まで, 「痴人の愛」「蓼喰ふ虫」を書いた。
- (33) 雨宮庸蔵氏談話(『小林多喜二の肖像』2) 26 から 30 ページ。
- (34) 『北方文芸』1968 年 3 月 57 ページ
- (35) 『全集』第 7 巻 1983 年 404 ページ。
- (36) 同, 406 ページ。

- (37) 同, 408 ページ。
- (38) 同, 410 ページ。
- (39) 藤橋, 稿, 『北方文芸』1968 年 3 月。
- (40) 島田, 稿, 『多喜二全集』月報 2。
- (41) 「地主のブルジョア化」は, 当時左翼の日本資本主義研究で, 述べられていた。ただし, 磯野家はブルジョアの地主化であった。
- (42) 『小林多喜二の肖像 2』30-31 ページ。
- (43) 本州のこと, 北海道ではこう言う場合がある。
- (44) 西野『石狩川紀行』日本放送出版協会 1975 年, 166~168 ページ。
- (45) 『小林多喜二の肖像 2』31-32 ページ。
- (46) 江口, 22 ページ。